イスラーム世界研究　第 14 巻（2021 年 3 月）272–282 頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 14 (March 2021), pp.272–282

15–16 世紀モロッコにおけるスーフィーの系譜
――伝記集の記述から――

棚橋　由賀里*

Chains of Sufis in 15th–16th Centuries Morocco:
Examination through a Biographical Dictionary

TANAHASHI Yukari

This paper examines scholarly chains (silsila) of the Sufis of the al-Jazūlīya order in the 15th and 16th centuries in Morocco and tries to reconstruct their relationship diagrams. Many preceding studies considered Sufis of al-Jazūlīya to be heretics, ignorant, and strenuous, and placed them arbitrarily into rivalry between other orders or groups. First, the identities of those in the chain of al-Jazūlīya are revealed, after which a discussion ensues about what the Sufis of al-Jazūlīya thought or how they acted. Through an examination of *Dawḥa al-nāshir*, a biographical dictionary of Sufis and scholars in the 16th century, the paper verified 31 Sufis who belonged to the chains. It can be said that, this is a good starting point for studying the thoughts of the al-Jazūlīya order.

はじめに

本論考では、15–16 世紀モロッコで活躍したジャズーリー教団のスーフィーの学問的系譜（silsila）を明らかにして整理し、彼らの相互関係のマッピングを試みる。

第 1 節で 15–16 世紀モロッコのスーフィズムおよびジャズーリー教団の研究における問題点を明らかにする。第 2 節では、本稿で用いる伝記集である *Dawḥa al-nāshir li-maḥāsin man kāna bi-l-Maghrib min mashā'ikh al-qarn al-'āshir*（以下 *DN*）[1] と著者イブン・アスカル（Muḥammad Ibn 'Askar al-Ḥasanī al-Shafshāwanī, 936/1529–986/1578）について解説する。第 3 節でその記述内容を紹介するとともに、立項されたジャズーリー教団のスーフィーたちに関していくらかの分析を試みる。

1. 問題の所在

14 世紀後半以降、モロッコは支配王朝であるマリーン朝（1269–1465）の統治能力の弱体化[2]、ポルトガルによる大西洋岸の侵攻[3] により混乱していた。このような状況下で、15 世紀に登場したジャズーリー教団は、ポルトガルに対するジハードの実行やサアド朝（1509–1659）の樹立およびワッタース朝（1472–1554）撃破によるモロッコ統一への助力といった政治的活動、モロッコ各地での民衆教育拠点の建設といった社会的活動を行ったと考えられている。それ以前のモロッコに

*　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1）Ibn 'Askar al-Ḥasanī al-Shafshāwanī, *Muḥammad, Dawḥa al-nāshir li-maḥāsin man kāna bi-l-Maghrib min mashā'kh al-qarn al-'āshir*, Muḥammad Ḥajjī ed., Casablanca: Manshūrāt markaz al-turāth al-thaqāfī al-maghribī, 2015.

2）Maya Shatzmiller, "Marīnids," *Encyclopaedia of Islam*, New Edition, vol. 6, Leiden: E. J. Brill, 1990.

3）Vincent J. Cornell, "Socioeconomic Dimensions of Reconquista and Jihad in Morocco: Portuguese Dukkala and the Saʿdid Sus, 1450–1557", *International Journal of Middle East Studies*, 22(4) (1990), pp. 379–418.

おけるスーフィーの活動単位が個人や各地の部族の範囲であり、活動内容もズィクルやサマーウといった儀式・修行の実践、学術研究が主であった[4] ことを考慮すると、ジャズーリー教団がスーフィー教団の政治的パワーおよび大衆の支持の獲得の契機となったと言える。しかし、ジャズーリー教団に関して明らかになっていることは少ない。

ジャズーリー教団研究を困難にしている原因の一つは、史料の乏しさである。特に、教団組織の内実を知る手がかりとなる歴史資料はほとんどないと言ってよい。ワッタース朝期からサアド朝期にかけて、当時の王朝によって編まれた年代記は現存しておらず、教団の経済状況の手がかりとなるようなワクフ文書も見つかっていないのが現状である。そのため筆者は、当時のスーフィー自身による著作である思想書の研究を試みている。

さて、ジャズーリー教団に関する研究史上には、大きく2つの問題点がある。第1に、モロッコのイスラーム思想研究全体に言えることだが、学知に乏しく過激な言動をする「異端的」なスーフィーと穏健で「正統的」なウラマーという誤った二項対立が未だに乗り越えられていない点である。特に、教団の名祖ムハンマド・イブン・スライマーン・ジャズーリー（Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī, 以下、ジャズーリー。d. 869/1465）は、その死後2世紀以上経過してから書かれた伝記[5] の記述に基づき、シーア派的な言動[6] やジハードの呼びかけを含む過激な言動[7] を強調され、彼の弟子たちも同様の傾向を持つ集団と考えられてきた。しかし、ジャズーリー自身の神学著作の分析から、彼は当時のマグリブで主流であったスンナ派のアシュアリー学派神学を支持していたことが明らかになった[8]。スーフィーとして知られている人物のスンナ派知識人としての側面が切り捨てられてきたと言える。第2の問題点は、当時のモロッコにおけるスーフィーたちの関係の不明瞭さである。20世紀半ばまでの通説においては、体制側であったワッタース朝とウラマーたちに新興のサアド朝およびジャズーリー教団のスーフィーらが対置されていた[9]。前者のウラマーたちの中には、法学とスーフィズムの調和を目指し、国家の安定の重要性を主張した人物であるアフマド・ザッルーク（Aḥmad Zarrūq, d. 899/1493）とその弟子集団が含まれている。ザッルークがジャズーリー教団員の振る舞いを非難したことは事実である[10] 一方で、ジャズーリー教団とザッルークの弟子たちが組織として対立していた確証はない。20世紀後半以降、この二項対立的な構造にはさまざまな批判が行われている。たとえばコーネルは、ジャズーリーとザッルークの双方の流派の人物を師に持つスーフィーや、ジャズーリーの影響を受けながらもワッタース朝に協力的な

4） 14世紀後半から15世紀初頭にかけてのモロッコのスーフィーの活動に関しては、当時のモロッコを中心にマグリブに滞在したイブン・クンフズによる聖者伝である Ibn Qunfudh al-Qusanṭīnī, Abū al-‘Abbās Aḥmad al-Khāṭib (740–810/1339–1407), *Uns al-faqīr wa ‘izz al-ḥaqīr*, Muḥammad al-Fāsī; Adolphe Faure eds., Rabat: Faculté des Lettres Université Mohammed V, 1965. に詳しい。

5） Muḥammad al-Mahdī al-Fāsī (d. 1109/1698), *Mumti‘ al-asmā‘ fī dhikr al-Jazūlī wa al-Tabbā‘ wa mā la-humā min al-atbā‘*, ‘Abd al-Ḥayy al-‘Amrānī and ‘Abd al-Karīm Murād, eds., al-Dār al-Bayḍā’: Maṭba‘a al-najāḥ al-jadīda, 1994.

6） Mercedes García-Arenal, “La conjonction du sufisme et du sharîfisme au Maroc: le Mahdî comme sauveur,” *Revue du monde musulman et de la Méditerranée*, 55–56 (1990), pp. 233–256.

7） Vincent J. Cornell, *Realm of the Saint: Power and Authority in Moroccan Sufism*, Austin: University of Texas Press, 1998, pp. 187–188. *Mumti‘ al-asmā‘* の書かれた年代が遅く、内容の信憑性が低いことにはコーネルも同意している。コーネルは、*Realm*, pp. 157–160 において、*Mumti‘ al-asmā‘* の著者ファースィーは、サアド朝を滅ぼしたアラウィー朝の有力者らと親しい人物であり、アラウィー朝にとって不都合な記述を避けた可能性が高いという史料批判を行っている。しかし、コーネルの批判は主にジャズーリー死後のジャズーリー教団の教義の解釈に向けられており、ジャズーリーのマフディー的な言動に関しては *Mumti‘ al-asmā‘* の記述に同意している。

8） 棚橋由賀里「ムハンマド・イブン・スライマーン・ジャズーリーの『正統』思想――神学著作の記述を手掛かりに」『イスラーム世界研究』第13巻, 2020, pp. 160–167.

9） August Cour, *L’Établissement des dynasties des chérifs au Maroc: et leur rivalité avec les Turcs de la régence d’Alger, 1509–1830*, Paris: Ernest Leroux, 1904, pp. 53–58; Henri Terrasse, *Histoire du Maroc*, 2 vols, Casablanca: Atlantides, 1949, pp. 160–161.

10） Cornell, *Realm*, pp. 230–231.

態度を取るスーフィーの例を示している[11]。また、ジャズーリー教団内部も一枚岩ではなく、サアド朝への協力に関して大きく三派に分かれていたと主張している[12]。篠田は、ワッタース朝国家と地域権力に関する研究を通じて、ワッタース朝とジャズーリー教団の間に緊張関係はあったものの、両者は常に対立していたわけではなく、ワッタース朝主導の対ポルトガルジハードに協力するジャズーリー教団のシャイフも存在したことを指摘している[13]。さらに、この時代に活躍したスーフィーのうち、誰がジャズーリー教団に属しているのかということに関しても議論が分かれている。

このような状況で思想研究を行うにあたり、筆者はまず系譜の整理が必要であると考える。明らかにジャズーリー教団員と考えられる人物の伝記史料に書かれた師弟関係および系譜を探ることで、堅実に教団員の範囲を確定し、議論の土台を作ることができるからである。その手始めとして、本稿では *DN* を用いて、立項された人物の師弟関係や所属、立場を明らかにする。次節では、*DN* と著者イブン・アスカルについて説明する。

2. イブン・アスカルと *Dawḥa al-nāshir*

2-1. イブン・アスカルの生涯

イブン・アスカルは、936/1529 年シャフシャーワン（Shafshāwan, モロッコ北部リーフ山地の街）に生まれた。シャリーフ家系の女性である母アーイシャ・ビント・アフマド・アル＝イドリースィーヤ（‘Āisha bint Aḥmad al-Idrīsīya, d. 696/1563）は *DN* においても立項されており、ジャズーリー教団の第 3 代指導者であるアブドゥッラー・ガズワーニー（‘Abd Allāh al-Ghazwānī, d. 936/1529）のもとで教育を受けている[14]。

イブン・アスカル自身は高名なウラマーかつスーフィーであったアブドゥッラー・ハブティー（‘Abd Allāh al-Habṭī, d. 963/1555, 彼自身もガズワーニーからタサウウフを学んでいる）にタサウウフおよびイスラーム諸学を学び、強い影響を受けた[15]。*DN* にも、ハブティーからの伝聞をもとにした記述が多数見られる。967/1559–60 年にモロッコ北西部の都市カスル・クターマ（Qaṣr al-Kutāma, 現在のカスル・カビール）のカーディー及びムフティーに就任。969/1562 年にはマラケシュを中心にモロッコ南部に滞在し、スーフィズムを学んだ。その後サアド朝スルタンのムタワッキル（al-Mutawakkil, r. 1574–1576）の側近となった[16]。ムタワッキルが叔父アブドゥルマリク（‘Abd al-Malik, r. 1576–1578）に王位を追われてポルトガルへ亡命した際も付き従う。986/1578 年、ムタワッキルとポルトガル王ドン・セバスチャンの同盟軍対アブドゥルマリクの戦いであるマハーズィン川の戦いで敗死した。*DN* のみが彼の著作として知られている[17]。

2-2. *Dawḥa al-nāshir* 概要

イブン・アスカルは *DN* を死の前年である 985/1577 年に著した。タイトルの意味合いとしては『ヒジュラ暦 10 世紀（1495–1592 年）のマグリブに生きたシャイフ[18] たちの美徳に関する展開の系

11）Ibid., pp. 232–233.

12）Ibid., pp. 263–266.

13）篠田知暁『ワッタース朝期マグリブ・アクサーにおける国家と地域権力』京都大学文学研究科博士論文, 2015.

14）ガズワーニー以降のジャズーリー教団のシャイフは、女性へのイスラーム教育を熱心に行った。その経緯と教育内容に関しては Cornell, *Realm*, pp. 248–249, 267–268 に詳しくまとめられている。

15）*DN*, p. 21.

16）Ibid., p. 7.

17）G. Deverdun, “Ibn ʿAskar,” *Encyclopaedia of Islam*, New Edition, vol. 3, Leiden: E. J. Brill, 1990.

18）ここでのシャイフは、優れた人物を広く指す言葉であると考えられる。

譜』となるが、高名な人物に関してはそれ以前に没した者も立項されている[19]。立項されている人物の属性は、スーフィー（al-ṣūfī, ṣaḥb mashā'ykh al-ṣūfīya, al-mutaṣawwif など）、法学者（faqīh）、禁欲者（zāhid）、隠遁者（munqaṭi‘ ‘an al-dunyā, nāsik など）、聖者（walī Allāh）など幅広く、複数の属性を持つ者が多い。序文において、イブン・アスカルは彼自身の師とその同時代人を称えるという意図を述べている[20]。ジャズーリーおよびその弟子たちについて言及している最初期の史料でもある。また、歴史的事件への言及も多く、歴史書の乏しいサアド朝初期を知る上で重要な史料となっている。

3. *Dawḥa al-nāshir* に見られる系譜

3-1. 軸となるスィルスィラ

ジャズーリー教団に関連するスィルスィラは、最初に立項された人物であるユースフ・イブン・イーサー・シャリーフ・フジージー（Abū al-Ḥujjāj Yūsuf ibn ‘Īsā al-Sharīf al-Fujījī, 生没年不明）の伝記部分で詳しく示されている。イブン・アスカルは 955/1548 年にフジージーと面会している。以下に、フジージーの語るスィルスィラを引用する。

> 彼は私に彼の師たちのスィルスィラを告げ、私にその話を許可した。彼――神が彼を嘉しますように――は次のように言った。「私はこの道 al-ṭarīq を同時代人で友人であるムハンマド・イブン・イーサー・ファフディー・ミクナースィー（Muḥammad ibn ‘Īsā al-Fahdī al-Miknāsī,［ジャズーリー教団のシャイフで、ガズワーニーと対立し ‘Īsāwīya という派閥を立てたとされる[21]］）から学んだ。彼［ミクナースィー］はそれを同様に彼の師アブー・アッバース・ハーリスィー（Abū al-‘Abbās al-Ḥārithī,［d. before. 910/1504–5］）から学んだ。ハーリスィーはそれを彼の師でクトゥブ[22] であるアブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・スライマーン・ジャズーリーから学んだ。同様に、私はそれをアブー・ムハンマド・アブドゥッラー・ガズワーニー――神が彼を憐みますように――から学び、我が師アブー・ムハンマド［・ガズワーニー］はそれを彼の師にしてハッラール（al-Ḥarrār［絹の織り手の意］）として知られるアブー・ファーリス・アブドゥルアズィーズ・タッバー（Abū al-Fāris ‘Abd al-‘Azīz al-Tabbā‘,［d. 914/1508, ジャズーリー教団第 2 代シャイフ］）から学んだ。アブー・ファーリスはそれを彼の師で先述のアブー・アブドゥッラー・ムハンマド・ジャズーリーから学んだ」[23]。

この先のスィルスィラは、モロッコ出身のクトゥブでシャーズィリー教団の名祖であるアブー・ハサン・シャーズィリー（d. 656/1258）、やはりモロッコ出身のクトゥブであるイブン・マシーシュ（d. 1227）などを通じて第 4 代正統カリフのアリーの息子ハサン、そして預言者ムハンマドに至る[24]。以上の記述とイブン・アスカルの師ハブティーの師弟関係から、ジャズーリーからイブン・アスカルまでのスィルスィラは図 1 のようになる。

19）アフマド・ザッルークや高名な神学者ムハンマド・イブン・ユースフ・サヌースィー（Muḥammad ibn Yūsuf al-Sanūsī, d. 895/1490）など。

20）*DN*, pp. 11–12.

21）Cornell, *Realm*, pp. 263–264.

22）Quṭb, 聖者のヒエラルキーにおいて頂点にいるとされる人間。その地位は、移譲あるいはクトゥブの死によってのみ下位の者に引き継がれると考えられているため、現世にはつねに一人しか存在しない。

23）*DN*, pp. 12–13.

24）Ibid.

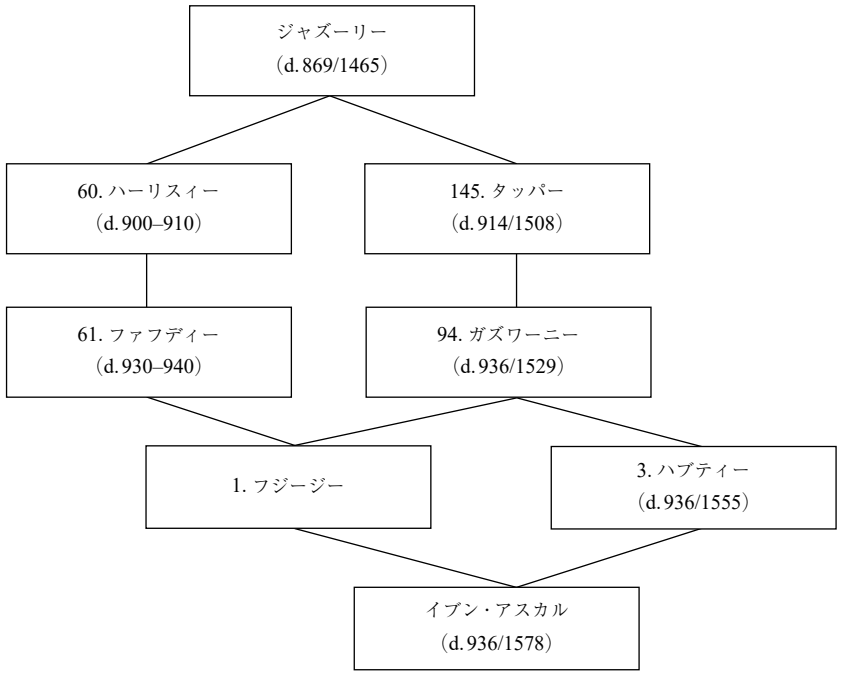

図 1　ジャズーリーからイブン・アスカルまでのスィルスィラ
（数字は *DN* における立項番号）

次節以降、図 1 のスィルスィラに基づいてジャズーリーのスィルスィラに属する人物の洗い出しを進めていく。

3-2. 伝記記述の類型

本稿では、*DN* の記述の類例を示す。立項者一人当たりの記述には長短あるが、著者が深く交流した人物の場合の構成には類例がある。ここでは、ガズワーニーの弟子であるアブドゥルワーリス・イブン・アブドゥッラー・ヤルスーティー（‘Abd al-Wārith b. ‘Abd Allāh al-Yalṣūtī）を例に挙げる。

まず、立項された人物の称号や出自が明らかにされる。

> 彼ら［立項されたシャイフたち］の一人は、ワリーであり、神と彼の知恵を知る者（‘ārif bi-Allāh wa-bi-aḥkāmi-hi）であるアブー・バカー・アブドゥルワーリス・ブン・アブドゥッラー・ヤルスーティーである。彼の出自はシャフシャーワンの村の近くのグマーラ族のヤルスート家である。彼の祖先はヤルスーム・イブン・アブドゥッラー・イブン・アバーン・イブン・ウスマーン・イブン・アッファーン――神が彼を嘉しますように――であると言われている[25]。

次に、著者との交流内容と立項者の学習歴と師弟関係が伝えられる。

> 私は彼と 7 年半交流した。私は彼にアブー・ザイドのフィクフについての論考、イブン・スィー

25）*DN*, p. 14.

ナーの医学についてラジャズ体で書かれた著作[26] を学んだ。またタサウウフの学についての［イブン・バナー・サラクスティー（Ibn al-Banā' al-Saraqusṭī, d. 721/1321）の］『真正の主題』（Mubāḥith al-aṣlīya）を学んだ。また同じく［タサウウフの学］についての［アフマド・イブン・アブドゥルムゥミン・］シャリーシー［（d. 619/1223）］のラーイヤ（rā'iya）[27] を学んだ。私は彼との交流から恩恵を得た（intafa'tu）。また私は彼のもとで法的規範（mu'āmalāt）の学を学んだ。彼は偉大な人物であり豊富な知識の持ち主である。人々の道（ṭarīq al-qawm）について千もの著作がある。また『真正の主題』について素晴らしい解説をした。彼［ヤルスーティー］は複数のシャイフから学んだ。彼は霊感の道（ṭarīq al-fatḥ）についてアブー・ムハンマド・アブドゥッラー・ガズワーニーに依拠した。なぜなら彼［ヤルスーティー］は彼［ガズワーニー］から学んだからである。彼［ガズワーニー］は彼［ヤルスーティー］の同志の年長者の一人だった。また彼は偉大なシャイフのアブー・アブドゥッラー・イブン・ガーズィー（Abū 'Abd Allāh ibn Ghāzī）、アブー・ハサン・イブン・ハールーン（Abū al-Ḥasan ibn Hārūn）、シャイフのアブー・アッバース・アフマド・ブン・ヤフヤー・ワンシャリースィー（Abū al-'Abbās Aḥmad b. Yaḥyā al-Wansharīsī）、また彼の息子のアブー・ムハンマド・アブドゥルワーヒド（Abū Muḥammad 'Abd al-Wāḥid）、アブー・マフディー・イーサー・マーワースィー（Abū Mahdī 'Īsā al-Māwāsī）、カーディー・ミクナースィー（al-Qāḍī al-Miknāsī）、イブン・ハッバーク（Ibn al-Ḥabbāk）といった人々と会った。彼［ヤルスーティー］は彼らから諸学や法学の道その他を学んだ。また彼には成功の兆し（dalā'il al-najāḥ）を見せた追随者たち（atbā'）がいた。彼――神が彼を憐れみますように――は教育の道の極致（ghāya fī ṭarīq al-tarbiya）だった。私は彼の仲間の一人を見た。彼は彼を黙らせた。沈黙せよと言う彼の命令のために彼は死ぬまで話さなかった[28]。

このように、詳しい場合は著者が立項者から、立項者がその師から学んだ分野や著作が明らかにされる。ジャズーリーのスィルスィラに連なっている場合はこの部分に記述がある場合が多い。また、ヤルスーティーのケースでは見られないが、他の著名なシャイフが立項者の知識や有徳さを称賛する言葉を伝える場合もある。

続いて、立項者の奇跡に関するエピソードが語られる。

彼にはいくつもの奇跡（karāmāt）が現れた。それらは大抵彼にとって不明瞭（khumūl）だった。スルタンが彼に会うために法学者たちのうちから彼を召喚した。彼はそれに出席しなかった。彼は面会を拒み続けた。彼は死ぬまでスルタンその他の欲望（ḥāja）を受け入れることはなかった――神が彼を憐れみますように。というのも、彼は彼らの交流で腐敗（al-fasād）をよく見ていたからである。したがって、彼は彼らに少しも晒されなかった[29]。

最後に、立項者の没年と埋葬について書かれている。

彼――神が彼を憐れみますように――はこの世紀の七番目の範囲（ḥudūd al-sab'a）［ヒジュラ

26）イブン・スィーナーが医学に関してラジャズ体の詩の形式で著した著作は複数あり、特定は不可能。

27）詩『秘密の光と光の秘密』（*Anwār al-sarā'ir wa sarā'ir al-anwār*）のこと。シャーズィリー系教団における重要なテキストとされる。

28）*DN*, pp. 14–15.

29）Ibid., p. 15.

暦960年代を指すか？］で亡くなった。彼の墓はワラガ川（nahr al-Waragha）の近くのアフマース族（qabīla al-Akhmās）のダルクール家の所在地として知られている場所にある。彼は90歳を越えて亡くなった[30]。

3-3. ジャズーリーのスィルスィラに属するスーフィーたち

本稿では、図1のうち著者イブン・アスカルを除く[31] 7名に直接学んだ者をジャズーリーのスィルスィラに属していると仮定した。具体的には、上記の人物をシャイフとしている記述のある者、「～から学んだ（akhadha ‘an ~）」という記述がある者のうちで学んだ内容がスーフィズム（taṣawwuf）やそれに関連するもの（ṭarīqa ṣūfīya、ṭarīq al-fatḥ など）であると明記されている者や本人に高潔者（ṣāliḥ）や有徳者（fāḍil）等スーフィー的側面の記述が見られる者[32]、また、「同志（ṣuḥba）であった」という記述がある者である。

その結果、ジャズーリーに学んだ者3名、ハーリスィーから学んだ者2名、タッバーから学んだ者7名、ファフディーから学んだ者1名、ガズワーニーから学んだ者12名、フジージーから学んだ者1名、ハブティーから学んだ者9名、上記7名から学んだ者からの弟子4名となる。複数のシャイフから学んだ場合の重複を除くと、該当する者は以下の計31名となり、師や仲間としたスーフィーの名前とともに示した。

通し番号	文献内番号	名前	師	仲間
1	1	ユースフ・イブン・イーサー・シャリーフ・フジージー	ガズワーニー、ファフディー	
2	2	アブドゥルワーリス・イブン・アブドゥッラー・ヤルスーティー	ガズワーニー	
3	3	アブドゥッラー・イブン・ムハンマド・ハブティー	ガズワーニー、アンダルスィー	
4	4	アブー・カースィム・イブン・アリー・イブン・ハッジュー	ハブティー	
5	6	ユースフ・イブン・ハサン・トゥリーディー		ガズワーニー
6	12	アフマド・ハッダード・ハムスィー	ガズワーニー、ハブティー	
7	13	アーイシャ・ビント・アフマド・イドリースィーヤ	ガズワーニー、ハブティー、フジージー、トゥリーディー、イブン・ハッジュー	
8	19	アリー・イブン・ウスマーン・シャーウィー	ガズワーニー	ハブティー
9	26	ムーサー・イブン・アリー・ワッザーニー		ハブティー
10	47	ムハンマド・ターリブ	ガズワーニー	
11	56	ムハンマド・イブン・スライマーン・バックーウィー		トゥリーディー
12	57	サイード・イブン・サーイフ・マーリキー	タッバー、ハーリスィー	
13	60	アフマド・ハーリスィー・ミクナースィー	ジャズーリー	ジャズーリー
14	61	ムハンマド・イブン・イーサー・ファフディー	ハーリスィー	
15	63	サイード・ラーイー・ドゥグーギー	ジャズーリー	

30）Ibid.

31）*DN* はイブン・アスカルが師や同時代人を讃える目的で著したものであり、イブン・アスカルに学んだ人物に関する記述はないため彼を除外した。

32）たとえばハブティーは法学者としても知られており、「ハブティーから学んだ」という記述のみではスーフィズムの道統に属する人物と確定できないため除外している。

通し番号	文献内番号	名前	師	仲間
16	78	マンスール・ブン・アブドゥルムンイム・サンハージー		トゥリーディー
17	91	アリー・ブン・イブラーヒーム・ターディリー		
18	92	サイード・アマスナーウ・タードリー		タッバー
19	93	ムハンマド・イブン・ダーウド・シャーウィー	タッバー	
20	94	アブー・ムハンマド・アブドゥッラー・ガズワーニー	タッバー	
21	96	アブドゥルカリーム・ファッラーフ	ファッラーフ	ガズワーニー
22	103	アブドゥッラー・ブン・フサイン・アムガーリー		ガズワーニー
23	108	アブドゥッラー・クーシュ・マッラークシー		
24	111	ムハンマド・イブン・ウィーサアダン	ファッラーフ、タッバー	
25	116	アフマド・イブン・ムハンマド・アッバーディー	ハブティー	
26	145	アブドゥルアズィーズ・タッバー		ジャズーリー
27	148	ハサン・イブン・アブドゥッラー・ジャズーリー		タッバー
28	149	ムハンマド・ガズウィー		ハブティー
29	151	ヤフヤー・イブン・アッラール・ウマリー・フルティー		タッバー
30	152	ウマル・ズィヤーティー	ガズワーニー	ハブティー
31	153	ムハンマド・ハッダード・ズィヤーティー	ガズワーニー、ハブティー	

3-4. ジャズーリーのスィルスィラに連なるスーフィーの称号と社会的地位

以上の 31 名の記述を見ていこう。

まず、立項者の称号に関して分析していく。先述の通り、冒頭で立項者の名前の前後にその称号が列挙され、一人で複数の称号が冠される場合が多い。ジャズーリーのスィルスィラに属するスーフィーたちの主要な称号の内訳を、*DN* 全体と比較しながら表に示した。

ジャズーリー教団員には、ワリーという聖者的側面や、神を識る者（‘ārif bi-Allāh）といった神

称号	ジャズーリーに連なるスーフィー（31 人）の内訳（%）	*DN* 全体（153 人）の内訳（%）
シャイフ（shaykh）	25（80.6%）	116（75.8%）
ワリー（walī）[33]	15（48.3%）	49（32.0%）
神を識る者（‘ārif bi-Allāh）	6（19.3%）	19（12.4%）
高潔者（ṣāliḥ）	7（22.6%）	28（18.3%）
有徳者（fāḍil）	7（22.6%）	32（20.9%）
禁欲者（zāhid）	4（12.9%）	13（8.5%）
知識人（‘ālim）	4（12.9%）	39（25.5%）
法学者（faqīh）	4（12.9%）	48（31.4%）
バラカ（baraka）	2（6.5%）	10（6.5%）

秘主義的側面を持つ者が多いことがわかる。その一方、知識人（‘ālim）や法学者（faqīh）といったウラマー的側面を持つ者は一定数存在するものの、*DN* 全体と比べると比率が少ない。また、表には掲載していないものの、ジャズーリー教団の指導者を務めたタッバーには「高い徳の山」（jabal al-faḍl al-shāmikh）「叡智の海」（baḥr al-‘irfān）、同じくガズワーニーには「神性への臨席を呼びか

33）複数形 awliyā’ や神の友 walī Allāh などを含む。

ける者」（al-dā‘ī ilā ḥaḍra al-rubūbīya）、イブン・アスカルの直接の師であるハブティーには「彼の時代の比類ない人物」（farīd ‘aṣri-hi）といった独自の称号も付け加えられ、イブン・アスカルの尊敬の程度が窺える。

また、個々のシャイフたちの社会との関わり方は様々である。弟子を育成する者、ザーウィヤを設けて人々のズィヤーラを受ける者、俗世との関わりを最小限にするなどがいる。それぞれの例を以下に挙げる。

①弟子を育成する例

ここで引用するのはハブティーの例である。

> 彼は知識を教え、公正を命じ、悪を禁じた。彼は彼の家族、息子、仲間の誰もが禁欲主義から逸脱して現世において所有することを許さなかった。男性も女性も、彼が彼のザーウィヤで神の書を朗読したり神の諸名を唱えたり、至高なる神に会うための知識を教えたり以外のことをしていたところを見たことがなかった[34]。

禁欲的な生活を送りながら、人々への教育を熱心に行なっていたことがわかる。

②山中にザーウィヤを設けてズィヤーラを受ける例

ここでは複数の例を紹介する。

> そのようなシャイフに、アブー・フッジャージュ・ユースフ・ブン・ハサン・トゥリーディー（Abū al-Ḥujjāj Yūsuf ibn al-Ḥasan al-Tulīdī）がいる。彼はアブー・ムハンマド・アブドゥッラー・ガズワーニーの仲間の一人である。彼には偉大な名声とザーウィヤがあり、シャフシャーウンの街から西へ半日の旅程がかかるそこにグマーラ諸部族の一つであるバヌー・トゥリード族のものとして知られている彼の霊廟（ḍarīḥ）がある。そこを訪れる参詣者や修行者は数千人にもなる。彼［トゥリーディー］は彼ら全員に食べたいだけ食べさせ、それは毎晩のことであった[35]。

> そのようなシャイフにワリーのアブー・ムハンマド・アブドゥルカリーム・ファッラーフ（Abū Muḥammad ‘Abd al-Karīm al-Fallāḥ）がいる。彼はマッラークシュの人で、シャイフのアブドゥルアズィーズ・タッバーの仲間であり、彼の後継者であった。彼はシャイフのスィーディー・アブー・ムハンマド・ガズワーニーの同時代人であり、彼と［擬似的な］兄弟関係にあった。（中略）彼は収穫され、もたらされた食べ物を供するための長いテーブルを持っており、たくさんの果物や、さまざまな種類の肉や、多くの種類の料理は説明しきれないほどだった[36]。

> そのようなシャイフにアブー・アブドゥッラー・ムハンマド・ブン・ウィーサアダン（Abū ‘Abd Allāh Muḥammad ibn Wīsa‘dan）がいる。彼は今もダラン山の山頂で存命であり、80 歳近い。

34）*DN*, p. 16.
35）Ibid., p. 24.
36）Ibid., pp. 91–92.

何千人もの人々が彼を訪れ、彼らの一人ひとりに彼らの望む食べ物を提供する[37]。

このように、人々の崇敬を集めてザーウィヤの対象となっているシャイフが複数存在する。いずれも参詣者に豊富な食物を提供する様子が語られており、シャイフたちの経済力と社会的影響力の高さが窺える。ジャズーリー教団の影響力の増大との関係も、今後考察を重ねていきたい。

③俗世との関わりを最小限にする例

最後に挙げるのは、15 世紀以前から見られる隠遁者的な側面のスーフィーたちである。

彼らの仲間に、高潔な導師でありワリーであり神への崇拝に専心しているアブー・アブドゥッラー・ムハンマド・ガズウィー（Abū ‘Abd Allāh Muḥammad al-Ghazwī）がいる。彼はシャイフのスィーディー・アブー・ムハンマド・ハブティーの仲間であった。この男は至高なる神への崇拝に専心しており、金銭に頓着せず、家族や子供を持たなかった。また彼は生計を立てるためのファトフ門近くでのスリッパ（bulgha）［作り］以外に何も持っていなかった。彼は俗世に出向かず、俗世の人々と交わらず、隠遁し、俗世の人々から切り離されていた。彼が真理なる御方――彼に讃えあれ――に会うのに時間はかからなかった。庇護（walāya）の兆候と神の深慮の神秘が彼に現れた。彼は神の完全な正義の僕の一人であり、至高なる神の方向への専心に深く乗り出していた[38]。

以上から、ジャズーリーのスィルスィラに連なるスーフィーたちの間でも、社会との関わり方には多くのバリエーションがあることがわかる。16 世紀以降のジャズーリー教団の社会的影響力獲得に関連して着目すべきは①と②の形態であろう。

3. スーフィーたちの相互関係

DN においては、ジャズーリーのスィルスィラに連なるスーフィーたちの関わり合いも多く記述されている。師弟関係や本節の初項で提示したような著名なシャイフからの言及のほか、見解の違いや忠告といった例も見られる。前項でも紹介したトゥリーディーの例を挙げる。

彼――神が彼を憐れみますように――には多くの著作があり、それによって人々に悔い改めるように命じ、そして奇跡（al-karāmāt）を探求することを求めていた。それはたびたび個々の聖者の位階を指した。シャイフのアブー・ムハンマド・ハブティーはしばしば彼に関してこのような宣伝を否定し、彼がそれらを開示することを禁じた。彼［トゥリーディー］は彼［ハブティー］より上の立場だった（huwa ‘alā sha’ni-hi）ため、アブー・ムハンマド［・ガズワーニー］が彼［トゥリーディー］に［宣伝をやめるよう］呼びかけ、彼［トゥリーディー］は沈黙した。彼は自ら本を出すのをやめ、死ぬまでそのままだった。シャイフのアブー・ムハンマド［・ガズワーニー］は誰かが彼について悪く言うのを望まなかった[39]。

ここからは、奇跡に関する知識を本の形で広めることに関する見解の違いのほか、スーフィー間

37）Ibid., p. 102.
38）Ibid., p. 125.
39）Ibid., p. 24.

の力関係といったものも明らかになっている。このような生き生きしたエピソードは他にも複数見られるため、スーフィーたちの相互関係を明らかにする上で参照していきたい。

また、第 1 節で触れた、15–16 世紀モロッコにおけるスーフィーたちの対立関係について、*DN* の記述から明らかになったことを示したい。まず、ジャズーリー教団の批判者として知られているザッルークについては、かなりの文量を割いて立項されている[40]が、経歴と功績が記されている一方で、ジャズーリー教団に関するザッルークの言及については書かれていない。また、*DN* に立項されている人物のうち、ザッルークに学んだ記述がある者は 2 名のみであり、ここからマグリブにおけるザッルークの弟子集団というものを読み取ることはできなかった。さらに、3-1 で明らかになったジャズーリーのスィルスィラに連なる人物との重複もなかった。

次に、ジャズーリー教団内部の派閥争いも、*DN* の記述からは浮かび上がってこなかった。コーネルによれば、先述のファフディーやファッラーフはガズワーニーと対立して派閥を形成したとされている[41]が、いずれの人物の項目にもガズワーニーとの対立関係に関する言及はない。

しかし、これらはいずれも著者イブン・アスカルがジャズーリー教団内部の人間であるということから、他のスーフィー集団への関心の薄さや、自分の属する教団の内紛に言及することの忌避感として説明が可能な問題である。スーフィーの集団や派閥に関しては、他の史料との照合を通じて読み解いていきたい。

おわりに

本稿では、伝記史料の記述から、先行研究において不明瞭であったジャズーリー教団のスィルスィラを明らかにし、ジャズーリーのスィルスィラに属する 31 名の人物を特定した。これにより、先行研究において不明瞭であったジャズーリー教団のシャイフの輪郭が明瞭になった。今後は、*DN* の具体的な記述のほか、彼らの著作を読み解いていくことで、その相互関係や思想をより詳しく明らかにしていきたい。一方で、他集団との勢力の重複と対立および教団内部の相互関係を *DN* から紐解くことは困難であることもわかった。この問題に関しては、上記シャイフたちの著作や他の資料との照合から分析していきたいと考えている。

また本稿の意義は、先行研究においてサアド朝初期の歴史資料として用いられてきた *DN* を、スィルスィラの手がかりとして用いたことにある。今回伝記資料の記述からスーフィー教団のスィルスィラを明らかにすることで、思想研究の足掛かりとして活用できることを示しえたと考えている。

40）Ibid., pp. 48–51.

41）Cornell, *Realm*, pp. 251–262; 264–265.